

仏事に願いをこめて

～通夜葬儀編～第二回

仏事にこめられた願いを聞く連載。今年度の第二回目は東京二組明順寺住職・齋藤明聖氏にお話を伺いました。

お寺で家族葬

お寺で家族葬を始めるきっかけは、自殺された娘さんを持つご家族からの切実な要望でした。

～葬儀が変化していく中で～

信頼関係

仏事としていかに葬儀を執り行いたいかわかるという願いはありますが、私は二十歳のときからお寺をお預かりしてきた中で、ご門徒さんとお寺の住職がいかに信頼関係を持ちえるか、葬儀はそういう場のように感じます。葬儀を無事終えることによつて、お寺の住職にも親しみ、信頼感を持っていただけ。私たちにしてみれば、門徒さんの様子がわかり、親戚の

様子もわかる。葬儀は信頼関係が得られる場である、これが若い時に一番感じられたことでした。

寺院の社会的存在意義

私が若い頃は、葬儀はほとんどが自宅でした。大きな葬儀はお寺です。その後、斎場ができてくると、便利さ故に斎場での葬儀がほとんどになり、気がつくとお寺の本堂はいらなくなっていたのです。だからここでもう一度お寺の本堂が使えるということ、家族葬によって示すことができたらと。

寺院の社会的存在意義が厳しく問

われる中、またしてもお寺はお葬式かという見方もあるかもしれません。でもこうしてお寺の本堂が皆さんに役立ててもらえる。そういう場として提供できることは社会的存在意義を示すことにもつながります。明順寺でも縁づくりのために様々な企画を実施しています。家族葬をお寺でしてほしいとの切実な願いに応えることこそ、立派なお寺イベントではないかと考えさせられます。

葬式仏教の再評価

「死者を切り捨てる近代の傲慢」という言葉を聞きました。葬式仏教と長い間揶揄されてきましたが、最近になってその葬式仏教の意義を再認識しているところの動きがあります。

葬儀を通じて死者と向きあい、そして自分自身とも向きあう、そういう役割をお寺は果たしてきたのだと思います。住職は、自信と誇りをもって日ごろの仏事に勤しんでいかなければならないでしょう。

—自分のできることは限られています。—

そうですね。一人の住職ができることは限られます。何かひとつチャレンジされてはどうですか。一番取り組み易いのは家族葬かもしれません。

葬儀社との協働

これからの世の中はみんなで一緒に協働していく時代だと思います。お寺の住職だけが頑張ればいいという問題ではなく、葬儀社とも、門徒さんとも協働していかなければならない。

いかにお寺以外の第三者の協力を得られるか。一緒に何かを作って行けるかが課題だと思っているのです。お寺で家族葬というのはそういう意味もあるのではないのでしょうか。

～実際に家族葬をするにあたって～

専用の祭壇

葬儀社に、明順寺本堂家族葬専用の祭壇を設計してもらいました。家族葬は親族・会社関係とか生花を上げてくださる人が基本的にいないのです。それとお寺の本堂は横幅があつて、小さな狭い祭壇が真ん中にぼつんとあると寂しい感じに受けられてしまう。だから心を安らげるためにも花の祭壇で、金額も抑えたもので、横幅を本堂に合わせて広げてもらいました。

自分の家のお葬式

普通は葬儀社にお金を払って出来上がったところにお坊さんが来る。ところがお寺の本堂でやると、朝みんなが来ない内に住職にお経を上げてもらえらるし、遺体も預かってもらえらる。

そして何かにつけて密着して：お通夜の後でも住職は帰る必要がないから接する時間も長い。

祭壇は葬儀社が作ってくれたには違いなくとも、住職がやってくれたような喜びを感じてくださる。安心感が違います。法話もゆつくりできる。皆さんが「あのとき住職さん、縁の話をしてくれましたよね」なんて後で言ってくれたりします。

お寺の立場になって考えると、家族葬ならば労働的にも寺族にそれほど負担にならなくてできます。祭壇も簡単だし、人数も限られているから、法事の延長線上で対応できる。「ああ家族葬ならいいわ、できるわ」と寺族の協力も得やすい。それが可能性を開く最大のことだと思えます。

―本堂の必要性というものを私も感じておりました。

お寺で家族葬をやると、住職としては自分の家の葬儀のような身近さを感じます。それが伝わるのではないですか、門徒さんに。住職は一生懸命やってくれているってね。

門徒さんと話していても「私の時もお寺でやってくれ」「自分の葬儀を明順寺でやるのが楽しみだ」と（笑）。とつてもいいことです。

―荘厳はお寺で用意しますか？

お寺にも葬儀の道具は備えてあります。それを使うのもいいけれど、葬儀社で賄える分は頼んで、喜んで仕事してもらいたいですね。

―それはバランスがいいですね。

繋がりが

実際大変ですよ。母に「あんたはいいことばかりやって、裏でやるのは私たちなのよ」と怒られて。でもそう言っている母でさえ、家族葬では本堂に自分の家族の葬儀のように接しています。それは伝わります。

おそらくどこのお寺でも家族葬はやっていけると思います。PRはしないまでも、そういう必要性にせまられてやっているのではないのでしょうか。

ただ小さいお葬式をやっているだけみたいなの、そういう関わりではなく今置かれているお寺の危機的状況を

考え、それを打開していく方法を模索する中で、家族葬が大きな意味を占めていくのではないのでしょうか。やつぱりお寺はお葬式かって、思うかもしれないけれども、それを越えて門徒さんとお寺・住職との繋がりができる、そういう実感を強く持ちます。

ホームページ（以下HP）

そして家族葬と同じくらい力を注いでいるのがHP。法事・葬儀にはHPのアドレスカードを配るそうです。

The image shows a screenshot of the website for Myojinji WESTIE. The header includes the name '明順寺' and the URL 'mjj.or.jp'. The navigation menu lists: 報恩講, 葬式, お内仏, 納骨, 法事, 檀越, お寺案内, 檀越募集, 檀越会, 檀越会費, 檀越会費の使途, 檀越会費の使途, 檀越会費の使途, 檀越会費の使途. The main content area is titled '仕事のこと' and contains text about the temple's activities and a photo of the interior.

是非ご覧下さい。

法事・葬儀には親戚として若い人たちも大勢来ます。そういう人たちにHPのアドレスカードをあげて「見てね」と。そうするとみんな喜んで「お寺もHPを作る時代になったんですか」「かわいいですね」とかね。そういうところから親しんでもらえればいいかなと。次代人材の育成は重要課題ですから。

―HPで繋げていくのですね。

昔は寺子屋でいろいろな人たちが集ったり、地域のセンターだったり、コミュニティになっていたわけです。それが「広場」になっていた。そういう中からお寺が形成されて、社会的な存在意義を示していたけれど、今はそれが全然なくなってしまっただからそういう「広場」のひとつをHPで表現して（HP企画会には門徒さんが参加している）、そしていずれはHPを媒体とした実際の人たちの集いを実現させたいと思っています。

【取材日・二〇〇九年七月二十二日
担当・朝倉、柳澤】